



真宗大谷派 本明寺通信

No.5

2007年7月1日発行



ネコは居心地のいいところを知っている

(近くの公園にて)

東京一組

御遠忌お待ち受け奉仕団

真宗本願寺(東本願寺)

五月十九日、二十日の一泊二日で、東京一組「御遠忌お待ち受け奉仕団」のため、真宗本願寺(東本願寺)に行きました。「御遠忌お待ち受け奉仕団」とは、お話(講義)や帰敬式、御影堂御修復現場視察など、真宗本願寺での時間を過ごすことを通して、宗祖親鸞聖人に出遇っていただきたいと願われて行われています。本明寺からは住職を含め三名が参加しました。そこで今回「御遠忌お待ち受け奉仕団」に参加され帰敬式を受式し、法名を頂き新たに真宗門徒として歩み出された二人の方から感想を頂きましたのでご紹介いたします。

高島 キヨ子

(法名 釋尼清蓮)

先日はお待ち受け奉仕団、並びに帰敬式に参加させていただきましたありがとうございます。お礼申し上げます。実は私は法名を頂く事を簡単に考えておりました。東本願寺行きが近づくにつれ、何も知らない私でも良いのだろうか、大丈夫なのかと不安でいっぱいの日も多々ありました。

いよいよ東京都駅に着き同朋会館に入りホッとしたのもつかの間、補導の平野さんのお話に続き、名札に奉仕団のタスキを着けて自己紹介、そして講堂にて結成式とな

りました。食堂では大勢の門徒さん、若い方から学生さん達も一緒に昼食を食べました。その後東本願寺の諸殿を拝見させて頂き、あまりの広さ、素晴らしさに驚き感動いたしました。また諸殿にてお庭を見ながら和気あいあいと清掃奉仕をさせて頂き身も心も洗われるように清々しい気持ちになりました。その後夕事勤行に感謝をして夕食、その後講義と座談。教導の望月先生、平野さんの大変良いお話を聞かせていただき感謝しております。そして一日が緊張しながらも夢のように過ぎていきました。

翌朝は阿弥陀堂で晨朝、続いて帰敬式、法名伝達式と厳粛に進み、これこそが身の引き締まる思いでまた感動でいっぱいでした。浄土

真宗の念仏の教えを聞いていくものとして大切に人生を送って行きたいと思います。それに御影堂の御修復現場を見させていただき、その大きさに驚き感動いたしました。また工事に携わってらっしゃる方々のご苦勞を感じました。昼食は枳殻邸（きこくてい）にて美味しく頂きました。それに庭園の散策は緑が美しくほっとしたこと

田中 良子

(法名 釋尼良淳)

五月十九、二十日、東京一組二十五名で一泊二日のお待ち受け奉仕団に参加し、帰敬式を受式して参りました。新緑の京都はお天気もよく、ご本山に着いて由緒のあ

る御門を入った時は少し緊張していたように思います。

初めに阿弥陀様、お聖人様、歴代のお上人様の御影が掲げられている阿弥陀堂に参拝し、同朋会館に入りました。会館では朝夕のお勤め、聞法、話し合い、清掃等々が日程に組まれていて、一つひとつが心に残るものでした。また、境内にある諸殿の拝観と現在御修復中の御影堂の現場見学は、どちらもその規模の大きさと長い歴史を感じ驚くばかりでした。二日目の帰敬式は阿弥陀堂で厳かに行われ、勤行のあと御影の近くに順に上がり、一人ずつ剃刀をあてられるのですが、いよいよ自分の髪にあてられた時は思わず目頭が熱くなりました。

有難い法名をいただき、一喜一

憂して何気なく過ごしていた今から、少しでも門徒としての自覚を持ち、一日一日を大切に生きてゆく事を心掛けるつもりです。



写真は、右から高島さん、住職、田中さんです。

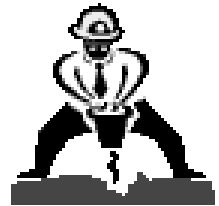
本明寺改築情報

根伐・杭頭処理
(四月二日)



根伐とは建物の基礎を造るために、その部分の土を掘ることを言います。

桜の根があったので大変だったんじゃないでしょうか。



杭頭処理は杭と基礎をうまく繋げるために、杭の余分な部分を取り除く作業です。これから本格的に基礎工事が始まります。

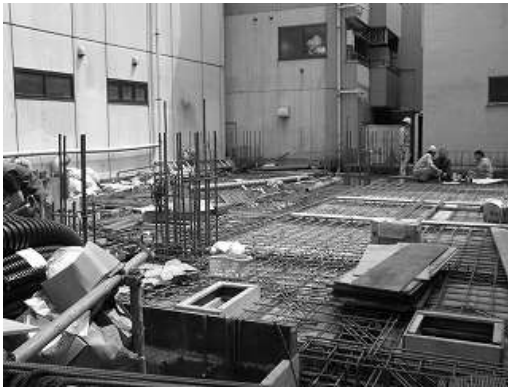


基礎工事
(四月十三日)

まずは、根伐した底辺のところにコンクリートを流し、杭の鉄筋と基礎の鉄筋を繋げ、配筋をします。



次に、設計通りに形を造るために型枠をつけ基礎の一番上の配筋をします。一番上ということは、一階の床部分ですね。



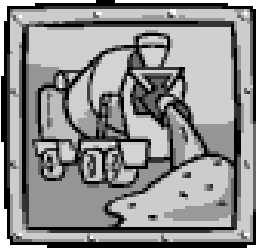
そこにコンクリートを流し整えてたら、基礎工事と一階床が完成です。



基礎工事が終わり、
いよいよ立ち上げで
す。



一階立上がり
型枠・配筋
(五月十七日)



柱の配筋が終わり型
枠をつけます。



型枠にコンクリート
を流して1階が立ち上
がりです。

改築情報は本明寺ホームページでもどうぞ!!

<http://www1.ttcn.ne.jp/~honmyouji/>

二階立上がり

型枠・配筋

(六月一日)

一階の型枠を外して、一階同様に柱の配筋をします。



これから二階、三階と立上げていくためにタワークレーンを立てます。

タワークレーンを立てるためのクレーンです。かなりの高さまで伸びています。



二階が立上がったんですけど、だんだん周りの足場で工事の様子が見えなくなってきました。これは困った。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 東京教区お待ち受け大会

東京教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌テーマ

今、いのちがあなたを求めている
—真のよりどころを求めて—

六月二日（土）に日比谷公会堂にて、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌東京教区お待ち受け大会が開かれました。今回は四年後（二〇一一年）にお迎えする親鸞聖人の御遠忌に向けて、東京教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌テーマ発表、御影堂御修復スライド上映、三名の先生にご出講いただいたの、東京教区宗祖親鸞聖人七百五十回

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを求めている—真のよりどころを求めて—」についてのパネルディスカッションなどが行われました。

そこでパネルディスカッションでのお話の内容をご紹介しますと思います。

パネルディスカッション

芹沢 俊介 氏（評論家）

清水 眞砂子氏

（青山学院女子短期大学教授）

武田 定光 氏

（真宗大谷派因速寺住職）

司会 二階堂 行壽 氏

（お待ち受け大会企画会チーフ）

◆テーマ

「今、いのちがあなたを

求めている

—真のよりどころを求めて—

を受けて

武田「このテーマを聞いたときに「現代はどうなんだ」ということを思った。それは現代という時代は流れなくなつたのではないかと思っている。昔は経済成長で未来

が右肩上りに進んで行くイメージが持てた。しかし、今は流れが滞留しているように思える。今、様々な事件が起こり昔に比べて人間が堕落したように見えるかも知れないが、人間は堕落したのではなく、もともとそういうものだったんじゃないか。それが今鮮明に現れる時代なんだと思う。堕落した人間を立ち直らせたなら、また明るい未来が見えるというわけではないと思う。

七百五十回御遠忌をお迎えするが、今は御遠忌が「来てしまった」というように外的なもので、内的なものではない。御遠忌は教団が示したことをみんなで、「右に習え」をしてもダメである。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞

一人（いちにん）がためなり
けり
（歎異抄 後序）

と親鸞が言っているように、「一人（いちにん）」に帰るということがテーマなのではないか。それをもっと過激な形で言えば「教団を解体しちやえ」ということ。「寺を解体しちやえ」ということ。これは本当に解体するわけではなく、真宗を「一人」という立場から受けとめ直すということである。清沢満之は「大谷派はどこにあるか」という問いに「大谷派なる宗教的精神のところにある」と言った。みんなが親鸞に寄りかかることが「真のよりどころ」になるのではなく、一人ひとりが親鸞に会い「真のよりどころを求めて」いくことが永遠のテーマである。

清水：「今、いのちがあなたを生きている」というテーマを聞いたときに、子どもが「お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんに似ている」ということを歌ったわらべ歌を思い出し、「人間は遺伝子を運ぶ船」ということを思った。「赤ちゃんが産まれた」ということを英語で「赤ちゃんが産まれさせられた」という受身で表現している。また「赤ちゃんがたった今到着した」という表現も使われる。このような表現を見て、今の人間は傲慢になっているのではないかと思う。それは「子どもを作る」と表現を شدした。昔は「子どもを授かる」と言っていた。「作る」と「授かる」とでは大きく違う。夫も「授かった」だと思ってもしくは「預かった」と思っている。

る。「授かった」ものには文句は言えない。「作った」だと自分でいかようにもできると思ってしまう。「授かった」「預かった」ものは自分のものではなくて、大事にある期間暮らさせてもらい、育てさせてもらって、やがて「還っていく」という気持ちがある。「子どもを作る」という言い方は、それが私たちの気持ちの中から消えかかり、傲慢になっていくからではないか。また傲慢なことは、今の人間は「断念する」と言うことを忘れていくことである。私たちの



生活の中で不慮の事故など、自分の力ではどうすることもできないことがある。お金や知識を積み重ねてもできると思っていることがある。

最後に、「なんでもないことが幸せだと思える。またそれをみんなで喜べる」という瞬間が、いのちが私を生きた瞬間であると思う。

芹沢…「今、いのちがあなたを生きている」と言うテーマを私なりに解釈してみた。

○「今、いのちがあなたを生きている」そのことにあなたは気づいていますか。

○あなたはいのちを生きようとしていますか。

○人がいのちを生きているのを私は妨げていないだろうか。

という問いかけを受けた。

次に清水先生の話で思い出すことは、幼護施設に入る子どものほぼ一〇〇%が虐待を受けてきた子どもである。虐待というのは、「いのちをとどまらせられた」ということである。そして幼護施設に来て間もなくの子どもは過食になることが多い。それは施設や人間関係に不安や緊張を持っているからだと思われる。三ヶ月くらいすると過食はなくなる。それは自分が施設から肯定されていると感じたとき、認められたと感じたとき、つまり施設に居ることに安心や安定したときである。これを私は「受けとめられ体験」と言っているが、その「受けとめられ体験」を通して子どもは「いのちに触れる」とか、「いのちを生きる」という感覚

になり、「これから生きていける」という核になるのだから思う。

現代はこの「受けとめられ体験」が欠如している。それは「受けとめ手」が少なくなっているからである。

◆「受けとめる」

「受けとめられる」ということ

清水：最近、実は受けとめられていない学生が多い。もつと言うと、いつも「いい子」でいなくてはいけないと思っている。「いい子」というのは明るい子、元気な子である。学校内の人（友達、先生など）に暗い表情は見せられない。家族には余計に暗い表情を見せることはできない。それは家族が心配するからだという。学生たちは家族に心配をかけてはいけないと思っ

ている。ある学生に「いつあなたは本当の自分になるの？」と問いかけた時、学生は「お風呂の時間」と答えた。

武田：生活の受けとめ体験を聞いて私が感じたのは『涅槃経』の阿闍世（あじゃせ）の問題である。阿闍世は父を殺し、母を殺そうとしたことを悩み苦しみ、色々な思想家の話を聞くが解決しない。しかし、お釈迦様の弟子である耆婆（ぎば）という医者を通してお釈迦様と出会い、阿闍世は癒されていく。阿闍世の「受けとめられ体験」はお釈迦様に出遇った時であると思う。

◆親殺しということ

芹沢：阿闍世のお話をされましたが、今、「親殺し」という事件がメディアを通して話題になっている。様々な形で「親殺し」の事件が起きているが、一つだけ共通点がある。「親殺し」の背景には「子殺し」があるということ。前に清水先生は「教育致死（教育により死に到らしめる）」という言葉が使われたが、子どもが親を殺す前には、まず親が子どもを殺している。それは阿闍世の物語も一緒である。阿闍世は産まれる前に二回、産まれてから一回、計三回も親に殺されかけている。「親殺し」はとんでもないという事になっているが、それ以前に子どものほうが先に、精神的、存在的に殺されている。つまり、安心できる経験や場所が奪われて

しまっている。それが「親殺し」が起る原因ではないか。

清水：芹沢先生が言われた、「親殺し」の背景に「子殺し」があるというところに、とても共感できる。

文学の中では、「親殺し」まではいかなくても、親子の対立は多く表現されている。親子の対立は文学の一つのテーマだった。文学、物語に触れることが少なくなった現代の学生たちは、親子関係では親と対立すること、親の期待から外れる事を恐れ、また友達関係では自分だけが親と対立してい



る、自分の家族だけが上手くいってないと思い込んで孤立していることがある。文学に触れることによって孤立した悩みが和らぐのではないか。

また現代の社会の中では元気で活発な人ばかり評価される。例えば障害を持つていたら社会から役立たずのように思われている。

決してそうではない。子どもたちだけではなく、人が生きていくうえで、いろいろな状況、境遇の人と出会うことによって、人としての幅が広がる。また自分がそのような状況になったとしても生きていく励みになるとか、「いろいろな人が生きていける社会」ということを考えるきっかけになり、子どもたち自身が社会から排除される恐怖を持たなくなるのではないか。

◆情報化社会の穴

芹沢：情報化社会だからといって情報が沢山あるとは思えない。自分には欲しい情報を欲しい時に得られない。「情報化社会」という言葉に踊らされている。情報化社会だから情報が何でも手に入ると思い込んでいる。

清水：インターネットなどで情報が溢れているように思えるが、肝心なものは私たちに届いていない。出回っている情報のほとんどは「生きる」ということには役に立たない。

武田：情報を送る側は視聴率を上げるため、「解りやすくして」「簡単で」「単純で」という情報を提供する。情報を受け取る側もそれを求

めてしまう。だから、情報はこっちから取りにいかない、情報が来るのを待っているだけでは本当の情報には手に入らない。『犯罪白書』を見ると、凶悪犯罪は年々減っている。しかし、報道を見ると毎日毎日、凶悪犯罪が増えているように思われる。「解りやすい情報」ということは、人間が考えなくてよくなるということである。「解りやすい」か「解りづらい」か、「善い」か「悪い」か、白か黒かの社会になっている。子どもに對しても何か一つ間違っていると全てがダメになってしまう。つまり人間がデジタル化している。



◆「ママゴト」が

成り立たない子どもたち

清水：今、子どもたちの中で「ママゴト」が成立しなくなっている。お父さん役をする子がいないのはだいぶ前からである。それはお父さんが何をしているのが解らなく、お父さんモデルがないからである。それから最近はお母さん役をする子もいない。お母さんも忙しくて魅力を感じない。更に子ども役をする子もいない。いろいろな習い事や塾などで忙しい。では一番人気の役は何か。それはペットである。みんなから無償で愛されて、自由であると思われるからである。これは子どもたちが追い詰められているのではないかと思う。

◆受けとめ手の受けとめ手は誰

芹沢：親子関係で、子どもは「受けとめられ体験」によって親（受けとめ手）を信頼していく。信頼というのは「受けとめられる」ということの繰り返しの中でしか築けない。しかし親（受けとめ手）の受けとめ手は誰かという切実な問題がある。

もう一つ、阿闍世と耆婆のお話で、阿闍世は悩んでいるのに思想家たちは「悩まなくていいんだ」と阿闍世の悩みを受けとめようとしなかった。しかし耆婆だけが阿闍世の悩みを正面から受け止めた。阿闍世は耆婆によって受けとめられる、また仏教に出遇った。多くの人間が受けとめ手になると自身を差し出す気持ちがあっても、その多くの人間が全て受けとめ手

になれるわけではない。しかし、差し出す気持ちがあれば受けとめ手になるチャンスはある。

武田：子どもを受けとめる私は誰が受けとめてくれるかという問題。「南無阿弥陀仏」とう我々の天下の宝刀ですが、やっぱり親自身が受けとめていないと子どもを受けとめられないということ。自身自身が親である前に共に死んでいくものなんだ。そこで初めて親ではなく子でなく横並びの関係になる。

清水：学生たちに子どもみたいが一番幸せな瞬間って何か聞いたところ、どこかに連れてってもらったこと、何かを買ってもらったことがほとんどだった。本当にそれ

だけかと思い、それ以外にあるか尋ねたところ、「おじいちゃんと電車に乗って座席に座っている時に私の足をトントンと叩いてくれたこと」と話した。そしてその生徒は「私はあれからずっと、おじいちゃんのトントんに支えられて生きてきたのかもしれない」と言った。私たちの幸せなことって、大きなイベントじゃなくて、日常にあることなんだと感じている。先ほど「受けとめ手は誰が受けとめるか」と言っていたか、受けとめて欲しいと思うているのは子どもだけじゃなくて、中高年も思っている。



ある時、子どもを「抱っこ抱っこキュ」と抱きしめてあげたという話を旦那にしたところ、「僕もしてほしかった」と言われたときにハッと気づいた。大人だから、いつも近くにいる人だからと思って、しなくてもいいと思ってた。旦那は口ではそんなこと言わなくても、心の中では「時には「抱っこ抱っこキュ」としてもらいたい」と思っているんだと気づかされた。老夫婦だろうが、こういう思いをお互いに言えればいいのと思う。そしてお互いに「抱っこ抱っこキュ」ってして、些細なことに目を向けたり、耳を傾けたりしたら、もうちょっと幸せになれるかなあと思う。

副住職の大まかな活動

児連

親鸞聖人お誕生のつどい

(四月三日)

親鸞聖人のお誕生日を縁として「親鸞聖人お誕生のつどい」が開かれました。今回はまず茨城県の報恩寺と、茨城県自然博物館へ伺いました。報恩寺は親鸞聖人の一番弟子であると言われる性信房（しようしんぼう）が開基者であると伝えられ、二百年の歴史があります。二百年分の念仏の染み込んだ本堂でのお勤めは、なんとも趣がありました。

児連 春の研修会

(六月十二日)

児連の研修会で救急救命法を学びました。講習では心肺蘇生法やAED(※)の使い方、三角巾を使得の応急処置法を学びました。心肺蘇生法では、昔自分が習った方法とは若干の変化がありました。また、心肺蘇生法とAEDを使得の救命法の実習では、練習だと解ついても焦つてしまいました。



今回講習を受けて、救急救命法の新しい知識と、日ごろからの心構え必要だと思いました。

※AEDとは、電源を入れると音声で操作が指示され、救助者がそれに従つて除細動（疾病者の心臓に電気ショックを与えること）を行う装置のこと。（公共スペースに上の様においてあります）

その他

伝道講習会修了者会

(四月十七日～十八日)

中央声明講習

(五月七日～十九日)

など、いろいろな会に参加しました。

ご報告いたします

5月5日、私本田彰一は、本明寺と同じ真宗大谷派であります上野池之端、福成寺の西尾有希さんと入籍を致しました。また、二人には新たな生命を授かり、12月に出産の予定でもあります。

結婚式、披露宴などは母子の健康を気遣い、まだ行っておりませんが、出産後に少し落ち着いてから行う予定をしております。

皆様方には今年の本明寺報恩講にて改めてご報告、ご紹介をさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

副住職 本田彰一

あとがき

◎今回の号では、初めてご門徒さんに原稿をご依頼して掲載しました。高島さん、田中さん、本当にありがとうございます。

◎お待ち受け大会の記事は、自分が大切なと思う所を抜粋しようと思つたら、削れずに文字が多くなってしまいました(反省)。

◎副住職入籍しました！

お騒がせいたしました。

発行 真宗大谷派 本明寺

副住職 本田 彰一(釋 彰一)

〒130-0012

東京都墨田区太平二-七-一

TEL 03-3623-1536

FAX 03-3623-1538

E-mail honmyouji@mx1.ttcn.ne.jp

URL

<http://www1.ttcn.ne.jp/~honmyouji/>